

【エッセイ部門・優秀賞】

65 点のこたえ

慶應義塾湘南藤沢高等部 第 1 学年 辻野 愛

名前が「あい」だから、小学生のときに「人工知能」というあだ名を付けられた。当時の私は気に入ることも嫌うこともなく、ただ冷たそうだなと感じていた。

近頃、生成 AI が話題になっている。文章を打てば適当な答えが返ってくる便利な発明に、マスコミは活用事例や危険性などを日々報じていた。私の学校の授業でも先生が生成 AI の話をした。

「何でも 65 点の回答をする。」

と先生は生成 AI を評価していた。そのとき私は低いと感じたが、今考えれば妥当な点数だと思う。もし生成 AI が偏った意見を無責任に伝えてしまえば、事実と違ったとき依頼人は満足しない。否定せず、肯定しすぎず。人間同士の会話でも大切なことだと思う。実際、それに救われたことがある。

高校生になって急に、自分の周りの人たちが将来について考え始めていることに気付いた。目標の大学に行けるように勉強に精を出したり、留学して他国の価値観に触れたり、次々に友達がそれぞれの人生のために歩みだしたと考えると、私は出遅れたようで焦ってしまった。将来したい仕事なんて明確には思いつかないし、自分が何を好きで何が得意なのかもよくわからない。いろいろ経験してみれば良いと他人は言うけれど、その経験さえも何をすれば良いのか想像がつかない。ずっと心に靄がかかったように不安が存在する。それでも日々は過ぎていき、新しい仲間と出会い、一緒にお弁当を食べたり体育の下手さを笑い合ったり、気付けば一学期も終わりに差し掛かった。期末試験を終えて時間に余裕ができたとき、友達に誘われて一緒にカフェへ行った。カスタムした甘いフラッペを飲みながら日常の話をしたと思うが、もう何の話をしたのか思い出せない。それくらい普段と変わらないくだらない会話だった。少なくなったフラッペの残った氷が目立つようになった頃、友達から悩みはないかと聞かれた。あるけど言い出せない。私はよくその子の悩みを聞いていた。可能な限り力になりたいと思って一緒に帰ったり家で電話したりしていたが、私の悩みはほとんど話したことがない。それは心配させたくないからだと思っていたが、そもそも自分のことを話すのがあまり得意ではないからだったのかもしれない。適当にごまかそうと思っていたけれど私は自分が抱えている不安を話していた。そして友達は、自身の経験や目標の話をしながら私が何に興味があるのか一緒に考えてくれた。考えようとすれば更に不安になってしまう自分の将来のことを、だんだんと想像ができるようになった。少しだけ楽になった。そして私は声を出せば泣いているのがばれてしまうから、頷くことしかできなくなった。「なんだ、悩みあるじゃん。」

友達がこう言ってくれた時、話してよかったと思えた。具体的に夢や目標が決まった訳でもなく何をすれば良いのか知った訳でもないが、肩の荷が下りた。友達が自分の悩みに寄り添って懸命に考えてくれたことが本当に嬉しかった。

このとき友達は私の話を否定せず、肯定しすぎることもなくただ聞いてくれた。そして彼女自身の話をしてくれた。今思えば、生成 AI と少し似ている。私の話に意見することなく、具体的な解決策を見つける訳でもなく、ただ話を聞いてくれる。では、もしも同じ悩みを生成 AI に相談していたら同じように楽になれただろうか。私は夏休みに抱いた悩みを相談した。

「愛猫を亡くした祖父になんてことばをかけて励ませばいい。」

「認知症で祖父に忘れられてしまった私の悲しみはどうすればいい。」

返ってきた答えは確かに適していて、同情してくれた。でもどこか冷たく感じて心は軽くない。返事は整った言葉の羅列で、辞書みたいだった。私に返しているけれど私のための言葉ではない気がする。

人の話す言葉にはどこか温もりを感じる。書かれた言葉や打った言葉でも同じだ。私に向けられた言葉は話者が私のために考えた言葉だからだ。悩みを相談したときの友達の応えは形式上生成 AI に似ているが、温もりが違った。私だけのために考えて実体験を交えて紡いでくれた言葉。優しさも一緒に過ごした思い出も全部込められた言葉。生成 AI が全く同じ言葉を返しても、こんなに私に響くことはなかっただろう。なぜなら AI は部活終わりに食べた美味しいアイスも一緒にカラオケで歌ったあの歌も知らないのだから。

一見完璧に思える作られた言葉より、つたなくても誰かのために紡がれた言葉の方が美しいと思う。私は伝えるのが得意ではないから 65 点以下の応えをしてしまうかもしれないが、相手への思いがあればより価値のある言葉になると信じている。